

Q: 今の目標は何ですか？

A: 7月にドイツで行われる世界選手権に出ることです。今後プールでの選考レースがあるので、自分は得意なのはビーチの方ですが、ライフセーバーである以上、プールの種目も一生懸命これから集中して頑張りたいです。

Q: 世界選手権の後は？

A: その後は、また夏の監視活動を頑張って、秋の全日本選手権をまた頑張って、それでまた3月にこの大会に戻ってきてみたいです。まずは、とにかく10回連続出場というところを大きな目標として、その中で結果も今まで以上の

ものを求めたいなと思っています。こちらでもあるように、30歳以上はマスターという高齢者の部があって、自分は実際に出れる年齢ですけど、やはりオープンという一番高いレベルのところで自分もまだまだ戦えると思っています。とにかく、できるところまで毎年頑張っていきたいなというのあります。

Q: 本多選手の夢を教えて下さい。

A: まず、ずっとこういうモチベーションを持ち続けること、そしてこの仲間とライフセービングをずっと続けていくことはやはり一番大きな夢です。その仲間と、これから長い人生の中で何かを作り上げて

いくことができたらと思います。もちろん、競技の結果としてもいいものを残していくたいと思っています。



木曜日の深夜に現地入りし、金曜と土曜で大会に出場、休む間もなくその日の深夜にはパースを離れ帰国の途につく。本多にとって、それは紛れもないこの大会への『強行軍』だった。それでも、この大会へのこだわりを「1年間のモチベーション」と言い、休みが取れなくても、どんなにタイトなスケジュールでも、ここに来たかった理由を語った。

しかし、レースは惜敗。最後は両脇の選手と半身ほどの差がつき、ホースチューブを手にすることはできなかった。ほんの数秒の闘い。それは、予選の最初のレースが始まり、たつた30分ほど後のことだった。

「すいません、負けてしまいました」

仲間の日本人選手としばらく話し、私の前に来た本多はこう言った。



本誌記者がみる

次の 一步

本多 辰也

をいい材料に頑張っていきたいなと思います」

負けたことで下を向くわけではなく、それを次に繋げていく。今回、結果にこそ恵まれなかつたが、改めて確認した“Always Next Time”という言葉の真意。それがあれば、本多は今年7月の世界選手権、来年の全豪選手権、そしてその後の全てのライフセービング活動でも必ずいつも何かを得て、立ち止まることなく次を目指し続けることだろう。真剣な目で、しっかりとした言葉で取材に応える本多から、そう感じた。

悔しそうな感情が確かに顔と声のトーンから感じられた。この大会を待ち望み、長い時間をかけて日本から来たことを思うと、本多には本当に「あっという間」だったに違いない。また、8年連続出場で、出場したという経験ではなく結果を求めて臨んだ本人からすれば、それ以上のショックもあっただろう。レース後、ビーチフラッグスの会場を仕切る鉄柵を背にして座り、次々と続けられるレースを目の前に呆然としていた本多の姿から、そう感じた。

取材中、本多は自分の活動の根底にあるものについてこう語ってくれた。

「オーストラリアで8年前活動させてもらっていた時に、クラブのコーチやメンバーに言われたのが、“Always Next Time”、つまり、いつでもまた次があるんだよっていう意味の言葉でした。今回は自分の満足する結果ではなかったけど、負けた後、同じような言葉を8年前と同じようにかけられて、『ああ、やっぱりその通りだな』と思いました。自分はここで終わるわけではないので、今回の結果は今回の結果として次に活かすために、また次の目標に向けてそれ